アニメーション『かぐや姫の物語』（二〇一三）研究序論

――「山里」と「都」を往還するかぐや姫創出の意味をめぐって――

黄　悦

はじめに

『かぐや姫の物語』は二〇一三年一一月二三日に公開されたスタジオジブリの作品である。監督は高畑勲が務めており、一九九九年の『ホーホケキョ　となりの山田くん』以来、一四年ぶりとなる。また、本作は二〇〇五年に企画が始まり、制作に八年をかけた、高畑勲の力作といえる。初日二日間で動員二二万二八二二人、興行収入二億八四二五万二五五〇円を記録する大ヒットスタートとなり、鈴木敏夫は本作の興行収入を二五億円と記している。[1] スタジオジブリの作品においては低い数値と言えるが、ボストン映画批評家協会賞アニメーション賞やアジア太平洋映画賞アニメーション賞を受賞し、[2] アカデミー賞長編アニメーション賞にノミネートされており、[3] 映画の評価は高い。[4]

この映画の原作となるのが、日本人なら誰でも知っている『竹取物語』である。なぜなら子どもの頃はかぐや姫のお話として絵本を読み、中学高校に上がると古典文学として触れている。日本人にはなじみの深い古典作品でありながら、これを忠実に映画化した作品はいままでほとんどなかった。唯一の映画化は一九八七年の市川崑監督によるものだったが、必ずしも高い評価を受けたわけではないとパンフレットに寄せた文章で高畑は指摘しており、『竹取物語』の映画化の大きな困難が原作に忠実であることだと示した。

高畑自身が述べたとおり、本作は原作である『竹取物語』に忠実な映画となった。竹から生まれるかぐや姫も、五人の貴公子や帝の求婚をものともせず、月へ帰って行くかぐや姫も、私たちの記憶にある『竹取物語』のかぐや姫だった。内容面に限らず、画面（絵画）においても本作は古典に忠実である。水彩画を基調とする表現を用い流れるように展開する画面は、絵巻物を思い出させる。高畑自身も著書に『十二世紀のアニメーション―国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの』（徳間書店、一九九九）があり、日本の古典や絵巻物に精通しており、本作の制作にあたっては多くの絵巻物や平安時代の資料を参考に作られたと語っている。

本作において、かぐや姫は頻繁に走りまわっていることが印象的である。子ども時代を過ごした山里では野山を駆けまわり、都に移ってからも成人するまで屋敷内を走り回った。名付けの祝宴では気持ちが高まり、凄まじい勢いで都から里山へと駆け下る。綺麗な桜を見かけては、我を忘れ駆け寄る。また終盤には、思いを寄せあった捨丸と空高く舞い、山を越え、川を下り、

海の上を飛んだ。原作ではあまり動かないかぐや姫は、本作において活発に走り、動く。また、一三七分にも及ぶこの長編アニメーション映画は原作には見られない、かぐや姫の物語を私たちに提示した。例えば、原作では小さな女の子として登場し成長していくかぐや姫だが、映画においては赤ん坊から始まり原作には触れられない子ども時代が丁寧に描かれている。子ども時代を描かない原作には無くて当たり前だが、幼少からの遊び仲間、とりわけ特別な存在である捨丸という青年も、映画の中ではかぐや姫にはなくてはならない人物の一人としてかぐや姫の物語を彩る。また、原作ともう一つの大きな違いは、かぐや姫が帝を完全に拒否していることである。原作では、帝とは三年も文を交わしており、月へ帰る際には帝へ手紙さえ書いている。一方、高畑のかぐや姫は帝に抱きすくめられたことで、悲鳴をあげ、挙句に恐怖を感じ月に救難信号まで出してしまう。

骨子は原作を忠実に踏襲しつつも、場面や人物の思い切った増補や改訂を行った本作は、いったい「かぐや姫」を通して私たちに何を見せたかったのか。

本研究では、具体的にアニメーション全体を、かぐや姫の居場所と時間の移動を基準にしながらシーンを分け、かぐや姫の行動について考察していきたい【表1】。かぐや姫の呼び名についても、時間の経過とともに、山里にいた時は「ヒメ」、都へ移ってからは「姫」、名付けされてからは「かぐや姫」の三つに分けた。また、都に移ってから住むようになった屋敷を「竹取の邸」とし、この普段生活する屋敷と区別するため、媼との庭のある離れを「媼の小屋」と記した。

かぐや姫の罪と罰

『竹取物語』研究において、かぐや姫の罪と罰については、先学によって諸々が提示されてきた。その一つは姦淫の罪である。三橋健は、「美しい美貌の女性が犯す罪は、日本の古典においては姦淫の罪と決まっていたといっても過言ではない」[5]と述べる。かぐや姫は月で姦淫の罪を犯したため、下界〈地球〉で恋をしてはいけないという罰を受けるというものである。また、罪は何なのかは明らかとされないまま、罰というのは求婚者に対して出された難題が、同時に難題を出した者への試練という性質を帯びて、かぐや姫を窮地に追い込み、その窮地を脱することこそ姫の贖罪になるとも言われている。[6]しかし、高畑作品において斎藤環も指摘するように初潮の描写を強調したり、[7]かぐや姫に自ら救難信号を出させたりと、『竹取物語』原作にはない身体やセクシュアリティにかかわる描写や、行動が描写されているのであるから、原作とはまた異なる解釈をしているようである。すなわち原作において設定された「罪と罰」と、高畑作品の『かぐや姫の物語』のそれは、まったく同じであるとは言えまい。

高畑は、映画のパンフレットにおいて、かぐや姫は月で禁断の地である地球に憧れてしまったために地上に降ろされたと書いている。では、その月の世界とは何なのだろうか。シーン二六でかぐや姫を迎えに来た月の一行は雲に乗って来る仏さま【図1】であった。高畑自身もインタビューで「阿弥陀来迎図」を意識したと語っていたことから、月の王はすなわち阿弥陀さまであることがわかる。[8]月からの迎えが阿弥陀さまとすると、月の世界は極楽浄

土の死者の世界と想定されていると判断しうる。また、シーン二一でかぐや姫は帝に抱きすくめられ、自ら「死んでしまいたい」と月に救難信号を出すところからも、月が死者の世界だということがわかる。木村朗子は、「原作では月の都へ帰る最終場面に向かってまっしぐらに成長をするだけの姫に、生まれ育っていく人間らしい生命が与えられたのは、かぐや姫の罪が、おのれの寿命をまっとうせずに死したことにあるためではないか。」[9]と指摘する。木村はまた、かぐや姫は月の極楽世界に行けなかったため、もう一度生き直すために地上に降ろされたと述べる。しかし、そうであるのならばかぐや姫が持つ、月での記憶の断片とはどのようなものなのだろうか。三浦佑之は高畑作品において、月にいたかぐや姫は地上に降りたことのある天女の消されるはずの記憶の断片の残留に触れてしまい、それが禁断の地への憧れとなってしまったと解釈した[10]。その証として、聞いたことのないわらべ歌をまだ幼いヒメ（タケノコ）が歌えることを挙げている。また、益田勝実の論を受けて、保立道久はこの記憶の断片を持つ憂愁に沈む天女の原型となるのは中国で古くから語られてきた姮娥（嫦娥）にあるとの指摘を行っている[11]。保立は高畑作品のかぐや姫は嫦娥の憂愁の姿にあこがれ、月世界のタブーである嫦娥の記憶を呼び覚ましてしまったことが罪であり、「まっとしきかば、いまかえりこむ」という歌の記憶にとらわれ、罪を償うために地上に降ろされたと指摘している[12]。

地球で何をしようとしたのか

先述のように原作においても、また高畑作品においても、かぐや姫が月の世界でのタブーを犯してしまい、その償いとして地上に降ろされたという点は共通する。『かぐや姫の物語』のシーン二二において、かぐや姫自身が自分は月の住人であり、罪を犯したことでこの地に降ろされたと竹取の翁・媼に告げている。では、かぐや姫は何をするためにこの地に来たのだろうか。同じくシーン二二でかぐや姫は「私は生きるために生まれてきたのに。鳥やけもののように……」、そして捨丸と再会したシーン二五においては「生きている手ごたえがあれば、きっと幸せになれた」と地上に生きる喜びを感じるために地球に来たという説明がある。そして、この喜びに気づけたのは、それまでに地球で経験した悲しみの故である。では、この生きる喜びと悲しみを高畑は作品の中でどのように表していたのだろうか。

山里と都

シーン分け表【表1】から見てわかるように、かぐや姫は頻繁に二つの場を行き来していることがわかる。自然に囲まれた山里と、人工的に造られた都である。都においても、「媼の小屋」は山里の家の役割を果たしており、そこはかぐや姫にとって寛げる場である。そして、この二つの場を行き来することによって、かぐや姫の心理の変化が描かれている。

まず、シーン二・シーン三においてかぐや姫が「ヒメ」や「タケノコ」と呼ばれていた子ども時代は、山里が舞台であった。この時のかぐや姫は山里で自然の営みを感じ、木地師の息子である捨丸から自然と過ごす楽しさを教

わった。川に飛び込んだり、野山を駆け回ったり、ウリを盗んだり、キジを捕まえたりして自由に走り回って過ごしていた。「タケノコ」という呼び名もどんどん成長するかぐや姫が筍のようだからと周りの子どもたちがつけた綽名であるが、生命力と生きる力強さを感じさせる。シーン四において生活の舞台は都へと移り、厳しい教育係が付くようになる。それでも、まだ幼いかぐや姫はふざけたりして、「姫」となるための習い事にまじめに取り組もうとしない。これが変わったのはシーン八である。シーン七でかぐや姫は、自身の名付けの宴で酔客の下卑た言葉[13]を聞いて憤り、月夜を一目散に駆けて捨丸らのいる山里へ帰るが、そこにはもうすでに捨丸らはいない。シーン八で炭焼きの老人から、捨丸らの一族は山の木々を保つため旅立ち、一〇年は戻ってこないことを知らされる。季節は巡り、今は冬で死んだように見える山も、春になればまた蘇って来ることも教わった。そのあと都に戻ったかぐや姫は人が変わったようにふざけることもなく、まじめに習い事に取り組むようになる。シーン七までのかぐや姫は、戯れること、自由にはしゃぐことを許されていた。この子ども時代を輝かしくかけがえのないものとして描くことで、のちの都での息苦しい生活との対比が生み出される。

また、結婚にかかわるかぐや姫の考え方、態度についても、山里での生活が大きな意味を持ち、影響を及ぼしているのではなかろうか。原作において、かぐや姫の不婚は、月の住人であり昔の契りの償いのために地球にいるから出来ないという説明になっている。これに対し、高畑作品では、山里へ帰って自由になりたいから結婚は出来ない、そう読み取れるような理由づけがなされていると思われる。具体的にはシーン二三で、かぐや姫は媼から「まつとしきかば、今かへりこむ」の意味を教わり、里山へ帰りたいと強く願う。また、シーン一六で石作皇子から一輪の蓮華を送られ、都を離れここではないどこかへ二人で生きようと口説かれる。この時かぐや姫は石作皇子の真心と騙され、都ではないどこかでの暮らしを提案する言葉に感動する。直後の北の方の出現によって悔しく泣くのだが、かぐや姫が都ではない生活を望んでいることが、都のシーンにおいては垣間見られるのだ。これらのシーンから、かぐや姫にとって、里山は帰りたい場所であり、都はそこから逃れたい場所であることが窺える。

さてシーン一〇から、ヒメはおとなしくお歯黒や眉毛を抜き、何枚も着物を羽織り「高貴な姫君」として振る舞うようになる。ここから五人の貴公子からの求婚話へと物語は進展するが、注目したいのは、求婚話の開始が不幸の始まりであることだ。偽物を持ってきて騙そうとしたり、詭弁でたぶらかそうとしたり、求婚する貴公子は誰も本当にかぐや姫を好きでお嫁にもらいたいわけではない。更に、かぐや姫の出した難題で命を落とす者さえ出てしまう。シーン一七で媼からもらった庭も「こんな庭ニセモノよ」と言って壊し、「みんなニセモノ！私もニセモノ」「みんな不幸になった。私のせいで」「ニセモノの私のせいよ」と、本物の高貴な姫君でもない自分がそのような「ニセモノ」を求めるからみんなを不幸にしてしまうと、自責の念に駆られ泣きじゃくる。それを月明かりが照らす中、媼はただ宥めるしかなかった。更にこの不幸に追い打ちをかけたのは帝の（竹取の翁自ら手配したが）夜這いである。突然抱きすくめられたかぐや姫は悲鳴をあげ、恐怖を感じ月の住人である記憶が戻る。それと同時に月に救難信号を出してしまう。シーン二

一で月の記憶が戻った瞬間のかぐや姫【図2】は無表情で、部屋にはそれまで差し掛かっていた夕日はなく、青白い冷たい光が差し込んでいる。かぐや姫はこの出来事をきっかけに、自らが月に帰るべき身であるという事を知り、月を眺めては憂いに沈む日々を送ることになる。だが月へ帰らなければならない事を告げるシーン二二でかぐや姫は、都でのこの悲しみに心苛まれる体験を経て、自分が何のためにこの地に降り立ったのかを思い出すのだ。それはこの地に生きる喜びを感じるためであり、人の情もまた地球の素晴らしいものだと再認識する。シーン二六で天女に地球は穢れていると言われるが、この地は穢れてはいないし、生きるものはみんな彩りに満ちていると反発する。里山から都に暮らしを移したかぐや姫は、一度は否定した地球を、改めて肯定する。地球で生きることの素晴らしさを、里山と都の対比することで、つまりかぐや姫はそれぞれの場での実体験を通じ再確認したと言えよう。

捨丸と帝

映画の中で、かぐや姫にとって特別な存在が木地師の息子の捨丸である。かぐや姫の子どもの頃の遊び仲間であり、自然との暮らしの楽しみを教えてくれた人である。さらに二人は秘密の共有までした仲である。シーン二、里山での子ども時代に、ウリを盗むシチュエーションが描かれる。見つかりそうになって二人は道路の草の茂みに隠れる【図3】が、この茂みは「閉ざされた秘密の場所に二人がいるみたいな場面」[14]である。ウリを盗むシーンには閉ざされた空間での秘密の共有が強調されており、かぐや姫にとって捨丸が特別な存在であることを印象付ける。しかし、シーン一四で再会した二人の間には越えられない溝があるかのように描かれている【図4】。この再会のシーンでは、捨丸は鶏を盗みお店の人に追われている。花見に出かけたが気が滅入ってしまったかぐや姫の牛車が都大路を走っていると、捨丸を呼ぶ声が聞こえる。あわてて外を見ると鶏を抱えて逃げる捨丸を見かける。思わず声をかけてしまうが、かぐや姫が何もできず牛車の中から見る前で、捨丸は店の人に殴られひどく痛めつけられる。里山にいた頃はウリを盗むことで閉ざされた空間を共有できた二人だったが、今回は、かぐや姫は牛車の上にいて、捨丸は都大路を逃げ、路上に倒れ雨に打たれる。二人は開かれた都の大路という空間で再会し、かつての秘密の共有の不可能性を思い知らされる。これで二人の出会いは終わってしまうのか、と思いきやシーン二五で、最後の思い出にと媼が手配し帰った里山で再会を果たす。心を通わせた捨丸はかぐや姫と二人で逃げることを提案する。だが注意したいのは、この時点で捨丸には妻も子どももいることである。家族を捨てかぐや姫と誰にも見つからないように逃げる事は、再度かぐや姫と捨丸が秘密を共有することを意味する。秘密の共有が再び可能となったところで、かぐや姫は捨丸と駆け出す。喜びのあまり、空へと舞いあがるが、どこまでもどこからも照らす月から、かぐや姫は逃れることは出来ない。二人はそれぞれの現実に戻り、かぐや姫は結局捨丸と結ばれることはなかった。三浦佑之は「二人が結ばれたとして、この先どうなるかは、風土記や昔話が語る天女伝承の結末を見ればわかりきっているのだから」[15]だと指摘している。

一方、原作の『竹取物語』では文を交わし、月へ帰る直前には「いまはとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」[16]と手紙を渡しさえする帝は、

『かぐや姫の物語』においては完全に嫌われる存在に過ぎない。一般に先行研究においては『竹取物語』は、平安貴族社会への批判的姿勢を持ち、また月の住人を主人公にするものの、帝に手紙を渡すという設定や描写には平安時代の限界が現れているとの指摘がなされている。しかし、映画の中の帝は、かぐや姫から徹底的に拒絶されているのだ。この点から言えば、本作における帝という存在は、求婚した五人の貴公子と同じレベルにまで降格されているのではなかろうか。偽物や詭弁でごまかし、かぐや姫を手に入れようとする貴公子たちは、噂に聞く美しい容貌の女性を自分のものにしたいという男の欲望と独占欲である。帝もそうした貴公子たちとは変わらないことを映画では示している。帝なので他の貴公子たちとはやや異なる別ルートで接近するが、かぐや姫は帝の身体を拒絶する。シーン二一で、竹取の翁に案内された帝に突然抱きすくめられ、かぐや姫は悲鳴をあげ恐怖を感じている【図5】。同じ閉ざされた空間で秘密を共有する捨丸とは異なり、かぐや姫は閉ざされた空間で帝を拒絶する。すでに繰り返し述べたように、かぐや姫は里山と都の二つの空間を行き来するが、更に細かく見ていくと都の空間で、彼女は楽しみを奪われ窮屈な思いをしている。偽物の姫だと言われ憤ったり、貴公子たちからの求婚に心を痛めたり、里山での暮らしと比べると不自由で辛い。シーン二二で、翁は月に帰らなければならないかぐや姫に「これまで姫様の幸せだけを願って、お仕えしてきたものを」と嘆くが、かぐや姫は「お父様が願ってくださったその幸せが、私にはつらかった」と言い返す。このシーンでは、かぐや姫にとって都での生活は辛いものだということがはっきりと言葉で示されている。その辛い都の中でも、特に象徴的な場である宮中にいる帝は、かぐや姫からすれば、関わりたくもない都という空間の極点を占める存在なのかもしれない。

おわりに

映画の中のかぐや姫をシーンごとに整理していくと、自然と戯れ自由で生き生きとした里山と、自ら辛いと弱音を吐いてしまう都での生活が鮮明に対比させられていることに気づく。特に原作では触れられていない子ども時代を導入することで、かぐや姫という主人公が色鮮やかになった。またそれにとどまらず、里山の素晴らしい自然と生きることが、かぐや姫にとって都での結婚を拒否することへの理由付けとして表されていることが判明した。また、都での「高貴の姫君」としての生活の中で、たびたびの山里への「場」の移動に伴い、かぐや姫の心情の変化が表出されている。二つの「場」を行き来することで、かぐや姫は改めて地球で生きることの素晴らしさを体感する。かぐや姫は感情すらない清らかな月の世界と比べ、地球は生きる物すべてが彩りに満ちていると訴えかける。都での暮らしで再認識する里山での楽しい暮らし、里山にいたままでは真の価値を知ることがなかった地球で生きることの素晴らしさを、スクリーンの向こう側にいる私達に投げかけているようにも感じるのである。高畑勲の『かぐや姫の物語』は、原作『竹取物語』に対する批評的な視点を具え、すぐれた表現力を用いて独自のかぐや姫像を創出し、鑑賞者である私たちに強いメッセージを伝えようとする作品なのだ。

註

（1）鈴木敏夫『仕事道楽 新版―スタジオジブリの現場』、岩波新書、二〇一四、二三五頁

（2）ボストン映画批評家協会賞、「かぐや姫の物語」がアニメ賞を受賞 http://eiga.com/news/20141208/10/ 二〇一五年一月一五日最終閲覧

（3）アジア太平洋映画賞アニメーション賞を受賞 http://www.asiapacificscreenacademy.com/nomsarchive/kaguya-hime-no-monogatari/ 二〇一五年一月一五日最終閲覧

（4）「かぐや姫の物語」アカデミー賞長編アニメ部門にノミネート。宮崎駿監督に続き二人目の快挙 http://eiga.com/news/20150115/21/ 二〇一五年一月一五日最終閲覧

（5）三橋健「かぐや姫の罪」『ユリイカ』、（『特集・高畑勲「かぐや姫の物語」の世界』）二〇一三年一二月号八三―八六頁

（6）倪錦丹『『竹取物語』の物語性：「罪」を中心に」『大学院教育改革支援プログラム 日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』活動報告書 Vol.（海外教育派遣事業編）二〇〇九年度、二六九―二七一頁

（7）斎藤は「初潮の描写を強調するあたり、高畑監督の決意がうかがえる」と述べ、かぐや姫の罪は「感情」を知ってしまったことにあると指摘している。斎藤環『『戦闘美少女』としての『かぐや姫』』『ユリイカ』註6前掲、一一八―一二四頁

（8）アニメージュ編集部が刊行する『ロマンアルバム エクストラ「かぐや姫の物語」』（二〇一四）の第四章「『かぐや姫の物語』の誕生」において、高畑は「菩薩の楽隊が奏でる賑やかな音楽」（一六三頁）の部分で「あれは『阿弥陀来迎図』なんですね。平安貴族たちの間には既に浄土信仰があって、死ぬ時に阿弥陀様が救いに来てくれると考えていました。」とインタビューで語っている。

（9）木村朗子「前世の記憶」『ユリイカ』註5前掲、一〇一―一〇五頁

（10）三浦佑之「罪とはなにか―『竹取物語』と『かぐや姫の物語』」『ユリイカ』注5前掲、九五―九九頁

（11）保立道久「死の女神がなぜ美しいか―火山の女神かぐや姫」『ユリイカ』註5前掲、八七―九四頁

（12）同前、八七―九四頁

（13）かぐや姫の名付けの宴に参加した男性たちが翁にかぐや姫を見せて欲しいと言うが翁は仕来りだからと断る。それに対して男性たちは「なんだとぉ？しきたりだとぉ？」「本物の高貴な姫君でもあるまいに」「いったいいくら払ったんだよ」「その姫様とやらの名付けによ」「おばけみたいだったりして……」などの下卑た言葉を吐き、かぐや姫を傷つけてしまう。

（14）スタジオジブリ編『THE ART OF かぐや姫の物語』、徳間書店、二〇一四、八〇頁

（15）三浦佑之「罪とはなにか―『竹取物語』と『かぐや姫の物語』」『ユリイカ』注5前掲、九五―九九頁

（16）現代語訳：「今はもうこれまでと思って、天の羽衣を着るのですが、この時になって、帝を心からお慕いする気持ちがしみじみとわいてき

ます。」武田友宏『竹取物語（全）』、角川学芸出版、二〇一一、二三〇頁（現代語訳），二三二頁（古文）

〔図版出典〕

【図1】―【図5】二〇一四年一二月発売DVD『かぐや姫の物語』より

（千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

【表1】

シーン分け表		
シーン	場所	シーン説明
1	山里 （季節は春の始まり）	竹取の翁が一本の光輝く竹から小さな女の子を見つける。家に持って帰って媼に見せたところ、たちまち赤ん坊の姿になってしまう。
2	山里 （季節は春、夏）	翁と媼は女の子をヒメと呼び、大切に育てた。ヒメの成長は早く、ハイハイしていたと思うと、すぐに歩けるようになる。そして母豚に襲われそうになったところを捨丸に助けられる。その後、捨丸らとはよく遊ぶようになる。 一方、翁は竹から黄金を授かるようになる。
3	山里 （季節は秋）	季節は秋へと移り替わり、ヒメは年頃の少女まで成長していた。捨丸らと山を駆け回ったりなど、楽しい日々を過ごす。しかし、竹から黄金や豪華な着物を授かった翁はヒメを「高貴の姫君」にすべく、都へ移り住むことを決意する。そして、ある夜突然ヒメを連れて都へ出発する。
4	都 竹取の邸	目が覚めるとそこはもう都だった。これから住む豪華な竹取の邸に心を躍らせるが、教育係の相模から厳しくしつけられる。だが、お稽古事はふざけたりと、相模を困らせる。
5	都 媼の小屋	しばらくして、初潮を迎える。大人になった印として、盛大に宴を開こうとする翁。その宴に捨丸らも呼ぼうとするが、翁に断られる。寂しそうにしている姫に媼は自分の庭をあげる。
6	都 竹取の邸	斎部秋田から「なよ竹のかぐや姫」と名付けられ、髪上げと裳着の儀式が仕来り通りに行われる。名付け披露の祝宴は盛大に開かれたが、ずっと奥の御簾にいたかぐや姫は酔客の下卑た言葉を聞いて憤ってしまう。
7	都→山里	憤ったかぐや姫は邸を飛び出し、都を走り抜け、山道を上った。
8	山里	しかし、捨丸らと過ごした山は大きく変わっていた。以前住んでいた家には他の人が住んでおり、捨丸らの集落もない。偶然居合わせた炭焼きの老人から 10 年は帰ってこないことと、山が再び蘇るのを準備していることを知らされる。
9	山里→都	雪が積もった帰り道、かぐや姫は力尽きて気を失ってしまう。

10	都 竹取の邸	目が覚めたら、もと居た御簾の中で、宴会も続いていた。その後、かぐや姫はふざけることもなく、習い事をするようになる。盛大な祝宴のおかげでかぐや姫の噂は都中に広まり、多くの男性から文が届くようになる。
11	都 宮中	そして宮中で開かれる行事に参加した車持皇子、安部右大臣、石作皇子、大伴大納言、石上中納言ら五人の貴公子は、斎部秋田からかぐや姫のことを聞く。
12	都 竹取の邸	かぐや姫の噂を聞いた五人の貴公子たちは一斉に求婚を申し込む。それぞれかぐや姫を 5 つの宝物に喩え褒めたが、それを逆手に取りそれぞれが喩えた宝物を見つけ持ってきたら結婚すると、難題を言い渡す。
13	都→山里	かぐや姫が難題を出したことで、それまで邸の外にいた野次馬が帰っていった。その為、桜を見に行くことにしたかぐや姫。山里へ向かう途中、綺麗な桜の木を見つけ、駆け寄っていく。
14	山里→都	その桜の木の下で、不意に平民の子どもとぶつかってしまう。平民の親はかぐや姫にひどく謝ったが、かぐや姫は気を損ねてしまい、都を帰ろうとする。その帰り道、偶然にも盗みを働いている捨丸と再会する。しかし、二人の間にはすでに超えられない大きな溝があった。
15	都 媼の小屋	それから 3 年後、媼の小屋でくつろぐかぐや姫と媼。以前媼からもらった庭は立派に育ち、地面に這って見ると、まるで里山の風景だった。そこへ翁が慌ただしく、車持皇子が蓬莱の玉の枝を持ってきたと告げる。
16	都 竹取の邸	本物を持ってきたと思ったかぐや姫は複雑な気持ちになるが、のちに人工の物だと知って、一安心する。阿部右大臣も火鼠の皮衣を持ってくるが、火に燃えてしまう偽物だった。石作皇子は仏の御石の鉢ではなく、一輪の蓮華の花を持ってきて、「真心」でかぐや姫を口説いていたが、北の方に見破られてしまう。大伴大納言は海の嵐に怯え、石上中納言は亡くなってしまう。
17	都 媼の小屋	かぐや姫は石上中納言が亡くなってしまったことに、責任を感じてひどく荒れてしまう。自分がニセモノだから、みんな不幸になったと嘆き、媼から貰った庭もニセモノだと言って壊してしまう。
18	都 宮中	しかし、かぐや姫の噂は広まる一方で、帝まで興味を持ち始め、宮中に招こうとする。

19	都 媼の小屋	帝からの宮仕えの誘いに喜ぶばかりの翁であるが、媼は翁がかぐや姫のことをわかっていないと嘆く。かぐや姫も宮仕えするぐらいなら、死んだ方がましだと、きつい言葉を言う。
20	都 宮中	そんなかぐや姫に益々ひかれていく帝は竹取の邸に行ってかぐや姫を見ることにする。
21	都 竹取の邸	かぐや姫は帝が来ることを知らず、琴を弾いていたところ、突然侵入してきた帝に抱きすくめられ、悲鳴を上げてしまう。恐怖を感じ、帝の前から姿を消す。一方帝は満足げに帰った。
22	都 竹取の邸	それからというもの、かぐや姫は月を眺めるようになる。翁と媼が心配して聞くと、自分は月の住人で、罪を犯したため地上に降ろされたことや、次の満月には帰らなければならないこと告げる。
23	都 媼の小屋	かぐや姫を返さないように邸では忙しく準備をしている。媼はやさしくかぐや姫に寄り添い、わらべ歌を歌う。かぐや姫は天女の歌を歌い、媼から、「まつとしきかば、今かへりこむ」の意味を教わる。
24	都→山里	里山へ帰りたいかぐや姫を思って、媼が牛車を手配し、里山へ送り返す。
25	山里	再び帰った里山は、緑茂る子どもの頃の山だった。捨丸らも里山に戻っていて、二人は再会し、心を通わせる。だが、かぐや姫にはもう時間が残されていない。捨丸は二人でどこまでも逃げることを提案する。この思いは奇跡となり、二人は空高く舞い、楽しく飛ぶ。しかし、月に気づいたかぐや姫は落下していく。意識が戻ると、捨丸の傍にはかぐや姫なく、夢だったのかと、妻子のもとへ帰ってしまう。
26	都 竹取の邸	満月の夜、構えていた兵士たちは、月の王の一行の現れによって眠ってしまう。かぐや姫は操られたかのように月の王の元へ導かれが、子どもたちが歌うわらべ歌で我に返り、もう一度この地にいさせてほしいと願う。しかし、天女に羽衣を掛けられた瞬間、かぐや姫から表情が消え、翁と媼の声も届かなくなる。
27	地球→月	月の王と共に月へと去っていくかぐや姫。突然地球を振り返り、記憶を失ったはずのかぐや姫の目に、涙が浮かぶ。